

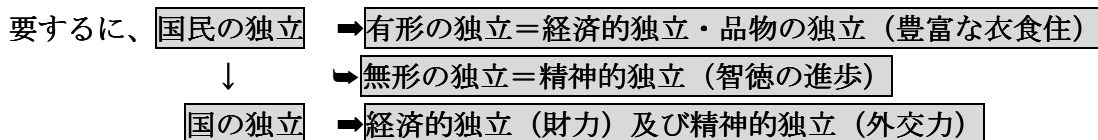
学問のすすめ 16編

手近く独立を守る事

● 「国民の独立とは、唯他人の厄介にならぬことなり。・・・その独立にも心身二様の別ありて、衣食住有形の需要を自力に弁ずるを身体の独立と言ひ、社会の交際、処世法に、我が思う所を言ひ、思う所を行ひ、・・・秋毫の微も節を屈する事なきを心事無形の独立と言う。斯く二様を全うして初めて人生の本意に叶うことなれども、その有形無形いずれか遠近と尋ぬれば、先ず有形の独立を得るに非ざれば無形の独立は遂に望なきことと知るべし。」(福翁百余話 人生の独立)

● 「一身独立して一国独立する事」(学問のすすめ 3編)

国中の人民に独立の氣力なきときは一国独立の権義伸ぶること能わず。



(1) 有形の独立は目に見えて、理解し易いが、無形の精神の独立は、意味深く関係も広く、理解し難い。したがって誤って解釈される事が多い。

「一杯、人、酒を呑み、(二杯、酒、酒を呑み、)三杯、酒、人を呑む」という諺あり。

(2) 今日世の人々の行状を見るに、本心を制するものは酒だけでなく、千状万態の事物ありて、本心の独立を妨げている事が甚だ多い。

★(原文の朗読) ①

「一家の内には主人なきが如く、一身の内には精神なきが如く、物よく人をして物を求めしめ、主人は品物の支配を受けてこれに奴隷使せらるるものと言うべし。」

(3) 尚これよりも甚だしい例がある。今までは品物の支配を受けるといへども、その品物は自分の物であったが、ここには、他人の物に使役させられる例がある。

★(原文の朗読) ②

(4) 自分の物でも他人のものでもなく、妄想に制せられる例もある。笑い事でない。

★(原文朗読) ③

「我本心を支配するものは自分の物に非ず又他人の物にも非ず、煙の如き夢中の妄想に制せられて、一身一家の世帯は妄想の往来に任ずるものと言うべし。」

(5) 独立の第一歩は財産作りにあるとて、心身に苦勞を重ねても、いざその財産を運用する段になると、逆に財産に支配されて、独立の精神を無くしてしまうとは、正に物を得るための方法が、かえって物を失わせるというものだ。

★(原文朗読) ④

「余輩敢えて守銭奴の行状を称譽するに非ざれども、ただ錢を用いるの法を工夫し、錢を制して錢に制せられず、豪も精神の独立を害すること勿らんを欲するのみ。」

心事と働きと相当すべきの論

- (1) 心事(説) = 志 = 議論 = 言 = 内に存するもの、自由で制限なきもの
働き = 功 = 実業 = 行 = 心に思う事を外に顕し、外物に接して処置を施す事
- (2) 言行一致が望ましい

★(原文朗読) ①

(3) 次に言行一致の例と、言行不一致の例を挙げて議論したい。

「第一 人の働きには大小軽重の別あり。・・・人の心事は高尚ならざるべからず、心事高尚ならざれば働きもまた高尚ならざるを得ざるなり。」

★(原文朗読) ②

「第二 人の働きはその難易に拘らずして用をなすの大なるものと小なるものとあり。・・・心事明らかならざれば人の働きをして徒に勞して功なからしむることあり。」

★(原文朗読) ③

「第三 人の働きには規則なかるべからず、その働きをなすに場所と時節とを察せざるべからず。」

★(原文朗読) ④

「第四 前の条々は人に働きありて心事の不行届なる弊害なれども、今これに反し心事のみ高尚遠大にして事実の働きなきもまた甚だ不都合なるものなり。心事高大にして働きの乏しき者は常に不平を抱かざるを得ず。」

★(原文朗読) ⑤

「また心事高尚にして働きの乏しき者は、人に厭われて孤立する事あり。・・・人に対して比較するところを失い、己が高尚なる心事をもって標的となし、これに照らすに他の働きをもってして、その際に恍惚たる想像を造り、もって人に厭わるるの端を開き、遂に自ら人を避けて独歩孤立の苦界に陥る者なり。」

★(原文朗読) ⑥

「至大の事より至細の事に至るまで、他人の働きに嘴を入れんと欲せば、試みに身をその働きの地位に置いて自ら顧みざるべからず。或いは職業の全く相異なるものあらば、よくその働きの難易軽重を計り、異類の仕事にてもただ働きと働きとをもって自他の比較をなさば大なる謬なかるべし。」

★(原文朗読) ⑦

以上